

赤ちゃん審査会が果たした役割と変容

——児童保護運動が健民運動に変わるまで——

大妻女子大学 大出春江

1 目的

本報告は、社会事業が成立する戦前期日本で誕生した児童保護運動を通じて、「児童保護」「児童相談」「衛生」「健康」といった、それまで日本社会に根づいていなかった概念が人々に理解され受け入れられていくプロセスを、赤ちゃん審査会の果たした役割という視点から明らかにする。

赤ちゃん審査会は「赤ん坊展覧会」、「乳幼児審査会」「児童衛生展覧会」などいくつかの名前で呼ばれた。教育社会学や保育学において、赤ちゃん審査会や 1930 年代の健康優良児表彰に関する先行研究があるが、赤ちゃん審査会が全国化していく過程や歴史的変容について十分な説明がされていない。本報告は、赤ちゃん審査会が戦時体制下まで続く過程における変容を明らかにする。

2 分析の対象と方法

1920 年代後半から 30 年代にかけて三重県や長野県などで日本各地で開催された赤ちゃん審査会の記録はいくつか残されている。その中で大阪児童愛護連盟が関わって誕生した日本児童愛護連盟による赤ちゃん審査会と、堺市産婆会主催の赤ちゃん審査会は、2017 年に実施した助産師会を対象とする資料調査を通じて、戦前期の写真帖の存在がわかった。本報告ではこれらの写真情報と文字情報の分析を通して児童保護の考え方が健民運動に変わるプロセスを提示していく。

3 結果

日本児童愛護連盟は 1929 年と 1936 年の 2 回写真帖を発行していることがわかっている。ただし現在確認できる写真帖は 1936 年版だけである。一方、堺市産婆会主催の赤ちゃん審査会は 1928 年～1942 年にかけてほぼ毎年開催され、その写真帖が残されている。

写真帖は赤ちゃん審査会の会場の様子、集まる人々の表情、診察する医師、介助する産婆、視察する役人、さらには集まる人々に向けた商品販売など多くの情報を提供してくれる。1927 年 12 月第 1 回の開催から第 13 回の開催（1942 年）までを通じ、当初は児童保護を目的とした運動として始まったイベントが、年を経るごとに健康な「第二国民」を賞揚する場が変わっていく。

4 結論

近代化する日本社会において、健康な子どもを一カ所に集めて身体検査をするという催し物がはじめて誕生するのは赤ちゃん審査会においてである。その意味で赤ちゃん審査会は医師と赤ん坊そしてその母親を結びつける役割を果たした。赤ちゃん審査会は健康な子どもの展示である。それによって児童保護、児童相談、衛生、健康等の概念が人々にわかりやすく伝えられた。全国化には民間の働き（大阪児童愛護連盟など）と内務省による官製赤ちゃん審査会の 2 つの流れがあった。しかしそれらは戦時体制下において健民運動へと一本化していく。赤ちゃん審査会の実務を担った医師は、戦争に向かう国家の意志を「健民報国」という考えとして伝える役割を果たしたのである。

[付記] 本論は、平成 29 年度文部科学省研究費補助金基盤研究(C)一般「日本の出産文化の歴史社会学的研究—リプロダクティブヘルスと助産所の機能を中心に」（研究課題番号 17K04151 研究代表者 大出春江）の助成を受けた研究成果の一部である。